

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

コロナ禍における在日外国人の文化活動 感染予防対策を講じた「国フェス」の事例から

猿 橋 順 子*

1. はじめに

2020年、新型コロナウイルスの感染予防対策として人の移動が大幅に制限された。日本では、2020年3月以降、国際的な人の行き来を伴う催事については、そのほとんどが中止、延期となっている¹⁾。本稿を執筆している2021年1月現在、首都圏はコロナ禍の第三波、二度目の緊急事態宣言下にあり収束の目処は立っていない。

これまで、すべての業種と人びとの生活にコロナ禍の影響があまねく及んでいる。逼迫する医療。大きな打撃を受ける航空業界。伸長する家庭用ゲーム業界。政策に翻弄される飲食業。国際競争にさらされるIT業界。明暗はさまざまであるが、すべての業種に働き方や、場合によっては業態の変更も余儀なくされている。試行錯誤の中で取られている対処が、将来的に業界全体、あるいは

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) この時期の新型コロナウイルス対策に関連する日本政府の対応は、2020年2月27日に、3月2日から全国すべての小学校、中学校、高校などは春休みに入るまで臨時休校とする旨を通達。4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言を行い、4月16日にその対象は全国に拡大された。首都圏1都3県は5月25日に解除された。この間、中止・延期となった代々木公園で開催予定としていた国フェスは、アイ・ラブ・アイルランドフェスティバル(3月14・15日)、ラテンアメリカフェスティバル(3月14・15日)、カンボジアフェスティバル(5月3・4日)、タイフェスティバル(5月9・10日)、ベトナムフェスティバル(5月18・19日)、ラオスフェスティバル(5月30・31日)、ジャマイカフェスティバル(5月30・31日)であった。

は社会全体にどのようなインパクトを与えるかは、時間を経過しての検証が必要となるだろう。

筆者は、移民の言語とアイデンティティ、日本に暮らす外国人およびその子孫たちのエンパワメントに資する言語政策、多言語社会と多文化共生のための多様性のマネジメント等を研究テーマとしてきた。ここ数年は、東京都渋谷区の代々木公園をはじめ、都心の大型公園で開催される国名を冠したフェスティバル（以下、国フェスとする）を対象に、実地調査を重ねてきた。フィールドワーク演習としてゼミ生達と参加し、卒業論文テーマとして取り組んだ学生もいる。

国フェスは、その催事ごとに特徴や傾向はあるが、相互参照と同じ場所を使用することから、互いに似通った形式を持つ。共通点として以下が挙げられる。年に1度、週末に開催される。ステージプログラムとブースエリアに大別され、出演者や出店者の多くは公募される。運営は在日外国人の協会や文化交流団体、外国人支援のNPO、その国で活動するNGOなどの代表からなる実行委員会が組織され、大使館や商工会議所、文化・観光・貿易などを管轄する駐日拠点共催したり後援したりする。協賛企業は出資者として重要な存在である。会場の準備や後片付け、当日運営にはボランティアが公募される。日本に暮らす当該国出身者と日本人の若者たちがボランティアとして参加し、国フェスの運営を手伝いながら交流を深める。講座やワークショップも企画されるが、それらは当日に会場で実施されるものもあれば、別の日程に別会場で開催される場合もある。

こうした枠組みの中に、それぞれの国の文化コンテンツが持ち込まれる。メインステージは、国フェス会場の中心で、当該国からパフォーマーが招待される場合、その演目が催事の目玉となったりする。本国から呼び寄せた演者は、開会式の前後や、フィナーレなど、特別な枠に配置されていることが多い。しかし、物販・飲食エリア、文化交流や情報発信のエリア、終日展開されるステージプログラムのほとんどが、東京近郊を拠点に活動や営業をしている人びとと団体で占められている。そのため、国フェスは、会場周辺地域（代々木公園の

場合、首都圏)のエスニックビジネスや当該国発祥の文化活動の活性度、彼／彼女らのネットワークの広さと厚みを推しはかる指標ともなる。

2. 本稿の問題意識

本稿を執筆している2021年1月現在、国フェスはおろかエスニックレストランをはじめとするエスニックビジネス、音楽や舞踊などのパフォーマンスの文化活動には大きな制約が続いている。

飲食店および文化芸術活動一般への日本政府の支援策を見てみよう。飲食店については、利用を推進するGo To イート・キャンペーンから一転、二度目の緊急事態宣言発令(2021年1月7日)に伴う時短営業の要請、それに対する協力金支給等をめぐり議論も現場も混乱している。

文化芸術活動については、文化庁第二次補正予算が2020年6月に可決され²⁾、フリーランスを含め、さまざまな規模・業種で芸術に携わる人と組織を支援する「緊急総合支援パッケージ」(506億円)が展開されている(文化庁、2020)。目下、第三次補正予算案が国会審議中である(文化芸術活動支援の予算案は370億円)。これらの支援パッケージの中身は内容ごとに区分され、事業種や事業規模によっても枠が異なるため、事業者は各自の事業がいずれの枠の支援が受けられるのかを識別するのにもひと苦労である。他の生活基盤を維持するための諸支援策も展開されており、それらとの連動(重複申請可能かどうか等)も確認を要する。

これらの支援策は、一部の「日本発の文化コンテンツ」に限定している文化支援事業を除いては、当然、従事者の国籍に関係なく日本を拠点に取り組む諸外国の文化活動にも適用される。とはいうものの、文化芸術活動であれ、飲食店への支援であれ、とりわけ在日外国人にとっては、公的支援策の内容と文脈の理解から、申請書類の作成、事業実施報告書の作成まで困難が多い。数十ページにわたる募集案内に圧倒され、申請を諦めてしまう人も少なくない。

2) 第1次補正予算は、緊急事態宣言で休校となっていた学校再開の準備(主に感染予防対策)に充てられた。

そこで、本稿では、筆者がこれまで国フェスでの調査活動を通してかかわってきた国フェス運営者、エスニックビジネス（レストランや雑貨店）、文化芸術活動従事者のうち、主に在日外国人の文化活動の観点からコロナ禍の現状の一端を報告する。とはいえ、状況は流動的である。コロナ以前の「当たり前」も再定義される。本稿は、学術論文というよりもコロナ禍の記録と位置づける。

3. コロナ禍の国フェス

新型コロナウイルス感染症の広がりを受け、不特定多数の人を集める野外イベントは、国フェスに限らず、ほとんどが中止となっている（注1参照）。2020年に代々木公園で開催された「リアルな」国フェスは、筆者が確認した限り、ベトナムフェスティバル（11月6・7日）とフィエスタ・デ・エスパルニャ（11月21・22・23日）の2件のみであった。代々木公園イベント広場では、10月から11月にかけて、イベント開催制限の部分的な緩和を受けて、これらを含め数件の催事³⁾が開催された。いずれも感染予防対策を徹底しての開催である。

ベトナムフェスティバルは「With コロナ時代の新しいスタイルのフェスティバル」を掲げて開催された。講じられた感染予防対策は、以下の通りである。

新型コロナウイルス対策

すべての来場者のみなさんに検査ゲートを通して頂き、検温、マスク着用をお願いをしました。

- 会場入退場ゲート：ボランティアによる検温、マスク着用声掛け、手の消毒を徹底。
- ステージ裏ゲート：ボランティアによる立ち会い、エア型バルーンゲート消毒ドームによりVIP、出演者の往来に対応。特にサーモ式検温器、次亜塩素消毒液を協賛頂いたことで感染症対応を強化。

3) 「earth garden “秋” 2020」（10月30・11月1日）、「東京雪祭 SNOWBANK PAY IT FORWARD2020」（11月14・15日）が開催された。

- 店舗：各店舗に次亜塩素消毒液を配布。店舗のスタッフへのマスク着用の声掛けパトロールによる安全対策の励行。
 - フリースペース：定期的に消毒を実施。
 - ゴミステーション：ボランティアのマスク着用、手袋着用の指導。
- (ベトナムフェスティバル 2020 実行委員会, 2020, p. 3 より部分抜粋)

2020年9月以降、代々木公園イベント広場を会場に予定していた催事のほとんどは、こうした感染予防対策を十分に行うことが出来ない、来場者や参加者の安全を確保することが出来ないとして、中止の判断が下された。

毎年開催される国フェスのほとんどが、公式サイトと連動して、Facebook, Twitter, Instagram等の公式SNSを活用している。ロックフェスの研究で永井(2016)は、日本においてフェスの隆盛とインターネットの普及率は「驚くほどきれいに一致」(p. 23)しており、両者は「共存共栄関係」(p. 24)にあると指摘する。「リアルな」国フェスの中止は、オンライン上で告知され、催事の中にはオンライン開催の提案も見られた。ただし、実際に国フェスでリアルタイムのオンラインフェスティバルを実施したのは、筆者が確認した限りでは、日韓交流おまつりとベトナムフェスティバルの2件のみだった。

日韓交流おまつりは、9月26日(土)の午後、13時から17時過ぎにかけてヴァーチャルな舞台エリアとブースエリアがYouTube上で展開された。K-popダンス教室、日韓の音楽家による共演、クイズ大会、予め募集されたK-popコンテストの結果発表等が行われた(日韓交流おまつり2020実行委員会, 2020)。このような大がかりなオンラインイベントを開催できるのは、多目的ホール(ハンマダンホール)を擁する駐日韓国文化院の存在が大きいの。駐日韓国文化院では、日韓交流おまつりまで2回のオンライン文化公演がライブ配信され(6月24日, 8月6日)、そのノウハウが蓄積されていた。

ベトナムフェスティバルも、9月26日(土)、18時からオンライン開催された。日韓交流おまつりと同日だったのは偶然の一致である。内容は、トークショーと音楽で、演奏は毎年ベトナムフェスティバルを盛り上げている日本の

ロックバンドが行った。過去のフェスティバルからのアーカイブ映像も流され、正味 30 分程度の YouTube 配信であった。短い配信だったとはいえ、ベトナムフェスティバルはオンラインと「リアルな」フェスティバルの両方を開催したことになる。

これら以外は、ほとんどの国フェスが、文言としては「オンラインフェスティバル」と銘打っていたとしても、公式サイトや公式 SNS 上で、(1) 物品の通信販売の案内、(2) 飲食店や雑貨店の紹介、(3) アーティストの活動紹介、(4) 本国のコロナ感染症への対応策や文化活動の情報、(5) 過去の国フェスのアーカイブ映像を掲載するなどにとどまっている。これらのうち、(2) と (3) は国フェスのオンラインサイトで以前から取り組まれてきたことである。(4) はコロナ感染症に関連した情報という意味では、コロナ禍特有であるが、本国の情報を伝達するという面ではコロナ以前から取り組まれてきたことである。(1) と (5) は、コロナ禍で着手、拡張された新しい試みといえよう。総じて、これらのオンライン空間が、情報拠点としての機能を高めている様子が確認された。

4. 国フェスの関係者

国フェスに限らず、野外フェスティバルを作り上げる人たちは、出演者と出店者にとどまらない。門や舞台の装飾、ブースや控室等の会場設営、音響、照明、給水など、さまざまな業種の人びとが関与する。いわゆる催事場や劇場、ライブハウスなど箱が予め用意されているイベントを手がけ、はじめて野外の催事にかかわった人は、等しく「野外は過酷」と嘆息する。

このように、野外フェスはさまざまな業種の人びとの関与の集積によって実現しており、国フェスもその例外ではない。だから、国フェスが開催できないことは、その出演者や出店者にとってのみ影響が及んでいるということではない。このことを前置いた上で、筆者が国フェスでの調査を通して関係を築いてきた首都圏のエスニックビジネス従事者（主にエスニックレストラン）および文化活動従事者（主にパフォーマンスアーツ）の現状を中心に報告する。

実は、国フェスの主催者と出店者・出演者の関係は、もともとそれほど単純

ではない。国フェス会場には人が多く集まるため、出店者にとって店を知ってもらうという効果はある。しかしキッチンなどの設備がない場所での料理提供は日頃の業務とは大幅に異なる。国フェスに出店するとなると、メニュープラン、価格、提供のしかたを1から計画しなくてはならない。毎年出店していれば、ある程度の販売予測が立てられるが、野外の催事は天候にも左右されるため、見込みが外れる可能性もある。路面店を出しているエスニックレストランの場合、店を休業にして出店するか、一部の従業員だけで催事に参加するかの決断は大きい。ほとんどの国フェスで出店者は出店料を支払うので、それを差し引いての売り上げを確保しなくてはならない。

だから出店者にとっても、国フェス参加は「過酷」な面が付きまとうのである。筆者は国フェスでのフィールドワークを実施する際、開場時間の1時間前を目安に巡回を始めるようにしている。その時間帯、ほとんどのレストランブースは、お客さんを迎える最後の仕上げとしてブース周りの装飾をしたり、遠目に見て問題がないか確認をしたり、開店前の記念撮影をしたりしている光景が見られる。知り合いに朝の挨拶をすると「昨夜は(料理の)仕込みで一睡もしていません」という声を聞くのは珍しくない。国フェスは土日に開催されるので、日頃は別の仕事に就いたり、学校に通ったりしている家族や親戚が「助っ人」となって総出で支える。

「過酷」さを承知で国フェスへの出店を決断するのは「東京の真ん中で自分の国のフェスティバルが開催されるのだから協力したい」、「他の地域のレストランがどんな様子なのか知れる」、「古い友人、知人にまとめて会える」、「レストラン以外の情報も集約される」、「自分の国が、日本人にどんな風に見えるのかが知れる」、「実行委員会の人から直接連絡をもらって、良かったら出てくださいと言ってもらったので、出ないわけにはいかない」などの声が聞かれる。そして何らかの経緯があって出店しないことを決めている同業者のことを控えめに言及しながら「いろいろあるけど、お祭りだから」と締めくくるのである。

「毎年、来年は絶対出ないと思うんですけど、1年経つとその苦勞を忘れちゃ

うのか、出ちゃっています」と笑いながら言う人もいる。最初は「過酷」でも、毎年出店しているうちに要領を掴んできて、国フェスの常連となり、周りからも頼られるようになる。国フェスそのものが同国人コミュニティの相互扶助を生み出す一面もある。

こうして見ると、国フェスに出店しているエスニックレストランは、ある程度、営業が安定しているところに限られてくることになる。出店料は、予め募集要項に記載され、公開されている。それでも、筆者が研究仲間にその額を伝えたと「想像していたよりずっと高い」と驚かれる場合がほとんどである。そうした出店料を支払いながら、本来の営業への支障を最低限としながら、国フェスに出店するのは、経営面でも心情面でもある程度のゆとりがなければ不可能である。

他方で、日頃から集住コミュニティに根付いて営業を行っているエスニックレストランの参加は、彼らが日本で営業するなかで培ってきた味、信頼、ネットワークも持ち込むことになる。それは在日外国人の間で、確実に「あの店(あの人)が出店しているのだから安心」と催事への信頼感や、協力することへの誘引にもつながっている。

実行委員会側が全体に目配りをしながら調整をしているところもある。たとえば留学生団体の出店には、出店料を減免し、全体運営のボランティアを担ってもらおうといった相互協力関係を築いている国フェスがある。また、片親家庭のセルフヘルプグループに、個々人のエンパワメントとメンバー間の協力関係を築くことを重要視する観点から、出店料を免除しているといった配慮も見られた。こうした采配ができるのは、日本に暮らす同国人コミュニティの状況や課題、関係性を知っている人が実行委員会の構成員に入っており、周囲からの信頼のもと、調整の役割に就いている必要がある。これは簡単なことではなく、国フェスの規模が大きくなればなるほど難しくなる傾向も窺える。

国フェスは通常、入場無料なので、ブース出店者から集められた出店料は、スポンサー企業からの協賛金と合わせて、国フェス全体の重要な運営資金となる。主に会場使用料や会場設営費、招聘ゲストの旅費や滞在費などに充てられ

る。運営費が潤沢にあるわけではないため、本国から招聘するゲストを除いてステージ出演者への出演料は薄謝、多くの場合が無償である。首都圏近郊で文化活動に従事する人びとは、招聘ゲストのサポートメンバー兼、文化的・言語的な仲介役を担うこともある。あるいは、自分たちが結成しているグループで出演することもある。いずれにせよ、先に紹介したエスニックレストラン出店者とはほぼ同じ心持ちで、国フェスに参加している。すべてを繰り返すことはないが、「自分たちの国の文化が、大規模に紹介されるのだから、協力できることは協力していきたい」という気持ちが根底にある。

5. 在日外国人のエスニックビジネスと文化活動

現在のコロナ禍で、国フェスが開催されないことは、来場者にとっても主催者にとっても残念なことである。同時にコロナ禍は、これまで国フェスに参加してきたエスニックレストランや文化活動従事者の日頃の営業や活動に深刻な悪影響を及ぼしている。

もちろん、どの業種がどの業種よりも深刻であるといった比較は意味のないことであるし、同一業種内でも経営形態はさまざまなので、一律に語ることはできない。たとえば、同じベトナムレストランでも、バインミー（サンドイッチ）を主力としてきた店舗は、居酒屋のような経営形態の店舗よりもテイクアウトを中心とした販売方法に移行しやすいし、時短営業要請の影響も少ない。同じような営業形態のブラジルレストランでも、夫婦や親族で経営している店舗は、配偶者の一方が大使館勤務をしている家庭よりも家計収入への打撃が大きい。当然、心理的な不安もそれぞれが置かれた状況に連動する。Vertovec (2007) が「超多様性 (Superdiversity)」と表現したように、グローバル化時代の移民コミュニティ内部の多様性は拡張傾向にある。

それでも、誤解を恐れずに言えば、やはりコロナ禍および緊急事態宣言下において、エスニックレストランや外国の文化活動に従事する在日外国人の営業や活動は、日本人が中核となる事業より、大きな制約や困難に直面していると直観される。それは、以下のような事情が関係している。まず、エスニックレ

ストランの場合、日頃から SNS 等を活用していない店舗は、営業時間の変更や感染症対策にどのように取り組んでいるか、コロナ禍を受けての営業上の工夫や店主の思いなどをこまめに発信することができない。特に老舗店にその傾向が見られる。オンライン通販への展開も難しい。これは IT スキルに加え、言語の問題も関連している。雑貨店では、本国からの物品輸入に時間がかかっており、輸入品に頼った営業の場合、入荷の目処が立たないことを不安に思いながらの営業となっている。オンライン通販が一般化することで、輸入代理業の存在意義そのものも薄れつつある。また、従来であれば、繁忙期には親族が手伝いに来てくれるなどの行き来があり、それが心理的な支えにもなっていたが、それが出来ないことを心細く思う、などもある。家族で切り盛りしてきたインドレストランで、妻が里帰り中に国境封鎖となってしまう、店主と大学生の息子でなんとか店を維持しているといった事情を聞くこともあった。

音楽や舞踊などの文化活動従事者については、以下のような困難が聞かれる。まず、そもそも公演が開催できない。感染予防ガイドラインを徹底して公演を行ったとしても、知人や友人らに「観に来てください」とは言いにくく、集客が不安である。また、小中学校の国際理解教室などの巡回公演や、民族学校などのクラブ活動が中止・縮小され、演奏や指導に行く機会が減っている。こうした学校での活動の縮小は、2020年4月の緊急事態宣言下、学校が休校となったため、再開後も教科学習が優先され、文化活動や交流活動が縮小を余儀なくされたことなどによる。民族学校は日本の公立学校とは異なる感染予防ガイドラインが用いられている場合もあり、休校や再開の時期がずれることなども先が読めない不安として蓄積されていく。各々が主宰する教室でのレッスンも、感染症対策の一環として、受講生の人数を分散させる、当日キャンセルでもキャンセル料を徴収しないなどの配慮を行い、結果的に負担ばかりが増えている。公的な支援事業も展開されているが、申請書作成等まつわる困難は既述の通りである。

一方で、細々とでも文化活動を継続するという信念も聞かれた。目下、演者や指導者の国際的な往来が出来ない。当該国の文化活動を「ここ」で紹介した

り、指導したりできるのは、自分たちしかないという責任や自覚を改めて認識したと言う。

6. 感染予防対策を講じたベトナムフェスティバルでの実地調査から

2020年11月6・7日の二日間、「リアルな」ベトナムフェスティバルが開催された。社会情勢的には、「甚大な影響を受けている文化芸術やスポーツに関するイベントの需要喚起を目的」（経済産業省、2020）としたGo To イベント事業（2020年10月29日キャンペーン開始）が稼働し始めた時期であった。Go To イベントキャンペーンは、イベント等入場料の2割相当額に公的支援が受けられるという事業のため、そもそも入場無料のベトナムフェスティバルには適用されない。

感染予防対策を講じたベトナムフェスティバルは、短い準備期間、消毒・検温等のための入退場ゲートの設置と管理、密を避けるための人びとのコミュニケーション行動への介入など、従来の国フェスとは明らかに異なる動きや場面が見られた。その全容を示すことは別稿に譲り、本稿ではブースエリアとステージプログラムから、いくつかの諸相を紹介し、催事を通して垣間見える在日ベトナム人コミュニティの現状を報告する。

以下の表1は、2019年と2020年のブース出店者の内訳である。

表1: ベトナムフェスティバル出店者内訳

	2019年	2020年	2020年の状況についての特記事項
飲食	66	14	ベトナム料理の提供8軒（うちレストラン6軒）
キッチンカー	6	5	ベトナム料理の提供1軒
物販	45	24	
協賛	16	3	協賛企業総数は60社（2019）から45社（2020）に
本部・その他	10	6	
合計	143	52	

ベトナムフェスティバル2019実行委員会（2019）、ベトナムフェスティバル2020実行委員会（2020）から筆者が独自に作成

出店者数が多ければ、人びとの密集を作り出す確率も上がるため、感染予防対策の観点から言えば、出店者数が多いほどいいという話ではない。しかし、上記の内訳から、ベトナムレストランの出店が6軒ときわめて少なかったことが確認される。ただし、不参加のレストランにその事情を聞くことはできない。

レストラン以外でベトナム料理を提供していたのは、在日ベトナム仏教信者会とベトナム大使館である。ベトナム料理以外は日本料理店と中華料理店が出店していた。これは、短い準備期間といった事情からも、従来通りの参加が見込めないと予測した実行委員会が、フェスティバルの副題に「アジアの心」と付し、ベトナム関連に限らず参加を呼びかけたことによる。

これまでの国フェスと異なる特徴として、特定のブースに長い列ができていた。もちろん、平常時も人気店はある。行列が人を呼ぶのはフェスに限らず消費社会の常である。それでも、公開型の国フェスでは列に並ぶのを嫌う人が別のものを購入したり、他のものを買って、それを食べたり飲んだりしながら列に並ぶという光景を目にする。

感染予防対策を講じたフェスティバルでは、人びとは間隔をあけて、代表者ひとりが並ぶことが推奨される。フェスティバル2日目の午前中、間隔をあけて長い列に静かに並ぶ人びとの姿は、2015年から代々木公園の催事を観察してきた筆者にとって異様に映った。列に並ぶ人に理由を聞くとSNSで話題の店だという⁴⁾。その店舗は、ベトナム人夫妻がやっていた料理店の味に惚れ込んだ日本人が、夫婦が店を継続できなくなった時(コロナ禍で、という意味ではない)に、店舗もレシピも譲り受け、味をそのままに守っているのだという。並んでいる人は「今日はこの店のバインミーを食べに来たのだから、売り切れにならなければいつまでも並ぶ」と他の店には関心を払わない。もちろん全員ではないが、少なくとも筆者が話を聞くことができた人は、この店の「ストーリー」や「評判」に共感し、それ(だけ)を目的に来場しているのである。

4) 感染予防対策の観点から言えば、調査者が不特定の人に話しかけることはマナー違反である。フィールドワークは現場での聞き取りがひとつの醍醐味であるが、「新しい日常」のフィールドワーク法も検討していかなくてはならない。稿を改めて論じたい。

コロナ禍における在日外国人の文化活動

以前と変わらない光景も見られた。在日ベトナム仏教信者会が提供するバインミーを求めて並ぶ人びとの列である。以下は、2017年に、毎年ベトナムフェスティバルに参加しているという、日本の出版社に勤務するベトナム人女性(当時20代)に実施したインタビューからの抜粋である。

レストランエリアは見て回らないです。味が日本人向けになっているし自分で作るより値段が高い。お寺のところ(在日ベトナム仏教信者会の出店ブース)で買います。それはお寺の人たちは困っているベトナム人をずっと助けています。だからそこでバインミーを買うのは、半分はチャリティの気持ち。たぶんベトナム人はそこで買う人が多いと思います。味も美味しいですよ。

(インタビュー実施日: 2017年2月16日)

在日ベトナム仏教信者会は、埼玉県本庄市にある大恩寺のティック・タム・チー住職が会長をつとめる一般社団法人で、生活に困窮する在日ベトナム人の「かけこみ寺」ともなっている。このコロナ禍で、支援活動が逼迫しているとの報道がなされている(NHK, 2020.12.21)。

また例年通り、東京ベトナム学校に通う子ども達、在日ベトナム学生青年協会のメンバーによるベトナムの歌、舞踊の発表もあった。東京ベトナム学校は、日本に暮らすベトナム人の子ども達にベトナム語とベトナムの文化を伝えたいという思いから2014年に発足した任意団体である。在日ベトナム学生青年協会は、「在日ベトナム人同士の交流。学習・仕事・生活のサポート。ベトナムの民族文化を守り、日越の文化交流の架け橋となる」ことを目的に2001年に設立された留学生が中心となって活動する団体である。ブースで手工芸品のバザーをしていた留学生のひとりに話を聞いた。短く編集して掲載する。

故郷の家族は無事です。毎日SNSで連絡をとっていますから心配はしていません。コロナは大変だけど(ベトナムで起きた)洪水に比べたら1人ひとりが我慢すればいいことです。ステージで踊っている子達も、出来ることを考えて、ベトナムの踊り、見ている人が元気になれるような。

考えて、頑張って練習していました。こんな大きなステージで踊れるなんて、すごいですよね。僕は踊れない(笑)。僕は今、勉強を頑張るとき。
(2020年11月7日)

彼は、今、医師になることを志し、医学部で学んでいるようだ。ステージで踊りを披露したメンバーは、観客に「ブースに立ち寄って欲しい」と呼びかけ、ブースでは2020年10月にベトナムで起きたベトナム中部洪水を支援するためのチャリティバザーを行っていた。販売していた手工芸品はベトナムから送ってもらった草木で制作したアクセサリーや小物類である。それぞれが持ち場で力を発揮し、点を線につなごうとしている。

言語政策研究者の McDermott (2012) は、北アイルランドの二大都市、ベルファストとデリー(ロンドンデリー)で、公共政策の立案に係わる人、コミュニティリーダー、および12の異なる国を出身とする移民、総勢46人を対象にインタビュー調査を行い、博物館や図書館、お祭り、アートプロジェクト、草の根活動等の文化活動が、移民の継承言語維持とエンパワメント、マジョリティ側の多様性を尊重するための意識変革などへ寄与したことを報告している。これらの公共場での文化活動からは、移民について語られる際に話題としてのほりがちな、住居・就労・教育機会(の確保)、言語力の育成、差別などとは異なる談話が生み出される。

なかでも野外の公共空間におけるフェスティバルやアートプロジェクトは、社会から見えにくい存在になりがちな移民コミュニティの存在を可視化させる上で効果的である。彼らのルーツ言語が公共場で堂々と話されること自体が、特に年少者にとって自身の民族文化的なルーツを肯定する貴重な機会となる。彼ら自身がステージに上がる機会があれば、なおのこと効果的であるが、そのようなステージパフォーマンスを観客として見るだけでも効果はあると指摘する。結果的に、継承言語の維持と、ホスト社会の言語の獲得の両方の面で寄与したという。そして、McDermott (2012) は、そうした空間を形成する上で、移民たちの自主企画力を尊重し、組織力が伸長することを配慮した地域の活動助成制度 (Community Festivals Fund, CFF) が効果的に役立てられたと報告して

いる。肝心なことは、企画する力、組織する力を育成することにある。支援者はそれを可能にする土壌や基盤を整えることが求められる。

7. おわりに

本稿は、コロナ禍における在日外国人の文化活動の現状について、国名を冠したお祭り、フェスティバルを対象とした調査から見えてきたことを報告した。本論でも述べたとおり、参加していないエスニックレストランに事情を聞くことはできない。しかしコロナ禍のベトナムフェスティバルで、ベトナムレストラン出店者数の激減から、彼らの置かれている厳しい状況が想像される。

翻って今までの国フェスに埋め込まれていた循環系を再確認した。国フェスは本国から招かれたビッグアーティストに注目が集まりがちである。しかし、それは移民コミュニティに根ざしたエスニックレストランや、民族学校等で日々指導にあたっている文化芸術活動従事者らを含む、たくさんの人びとによる下支えの上に成り立っている。一方で、彼らの日常から削り出される、全体から見れば小さな貢献の集積によって実現される華やかな祭典の日は、日本で生まれ育つ次世代の子ども達にとって、互いの文化ルーツを尊重し、地域の文化的多様性が体験される機会となる可能性を秘めている。そうした循環の触媒となる祭りやフェスティバルが、ゆとりのある一部の人びとによってではなく、誰もが当たり前に参加できるように、今、何が出来るのか。

「新しい日常」の地域社会に暮らす人びとに、等しく問われている課題である。

謝辞：新型コロナウイルス感染予防対策のもと開催されたベトナムフェスティバル 2020 での調査活動を快諾してくださいましたベトナムフェスティバル実行委員会、ならびに初回のオンライン文化公演への視察を快諾してくださいました駐日韓国文化院の関係各位に感謝申し上げます。先の見えない不安の只中であって、コロナ禍の現状をお話くださったエスニックレストランおよび文化芸術活動従事者の方々にも心から感謝申し上げます。また、2020 年度、筆者を

訪問学者として受入れていただきました早稲田大学国際コミュニケーション研究科ならびに同学、飯野公一教授に御礼申し上げます。当初の研究計画とは大幅な軌道修正となりましたが、自分自身の研究の軌跡を振り返る、充実した研究期間となりました。最後に、筆者の不在を1年間支えてくださった国政政治経済学部の同僚の先生方、いつも変わらず研究活動を支援して下さる合同研究室のスタッフの皆さまにも、心から御礼申し上げます。(2021年1月20日)

引用文献・資料

- 文化庁 (2020). 「文化芸術関係者への支援」 https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/sonota_oshirase/pdf/20200709_01.pdf (2021年1月20日アクセス)
- 経済産業省 (2020). 「Go To イベント事業について」 <https://www.meti.go.jp/covid-19/goto-event/pdf/info.pdf> (2021年1月20日アクセス)
- McDermott, Phillip (2012). Cohesion, sharing and integration? Migrant language and cultural spaces in Northern Ireland's urban environment. *Current Issues in Language Planning*, 13(3), 187-205.
- 永井純一 (2016). 『ロックフェスの社会学——個人化社会における祝祭をめぐって』 ミネルヴァ書房
- NHK (2020.12.21). 「コロナ禍でベトナム人の“駆け込み寺”が苦境に」 <https://www.nhk.or.jp/shutoken/wr/20201221a.html> (2021年1月20日アクセス)
- 日韓交流おまつり 2020 実行委員会 (2020). 「第12回日韓交流おまつり 2020 in Tokyo 事業報告書」 https://www.nikkan-omatsuri.jp/upload/2020report_jp.pdf (2021年1月20日アクセス)
- Vertovec, Steven (2007). Superdiversity and its implications. *Ethnic and Racial Studies*, 30(6), 1024-1054.
- ベトナムフェスティバル 2019 実行委員会 (2019). 「Vietnam Festival 2019 実施報告書」 <https://www.vietnamfes.net/2019/pdf/VF2019-report.pdf> (2021年1月20日アクセス)
- ベトナムフェスティバル 2020 実行委員会 (2020). 「ベトナムフェスティバル 2020 ベトナム・アジアの心 実施報告書」 <https://www.vietnamfes.net/pdf/Vietnam-Festival2020-report.pdf> (2021年1月20日アクセス)